

ライフデザインする力をはぐくむ試み

Practical Study on Educational Life-design Program

平松紀代子

Kiyoko HIRAMATSU

滋賀大学教育学部 家政教育講座

<キーワード> ライフデザイン ライフイベント ワーク・ライフ・バランス

1. 求められるライフデザインする力

教育の分野において、いわゆる「生きる力」をはぐくむことが注目されるようになって20年以上が経過した。遡れば、1996 (H8) 年に文部省 (現文部科学省) の中央教育審議会が発表した「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」の答申のなかで掲げられたキーワードが「生きる力」であった。この「生きる力」とは、確かな学力、豊かな心、健やかな体の知・徳・体をバランスよく育て、変動する社会のなかで自ら課題を見つけよりよく解決する資質や能力を指している。新学習指導要領においても、一層重要であるとされ、基礎的・基本的な知識・技能の習得と思考力・判断力・表現力等の育成との両方が必要と示されている。

本研究は家庭科領域の視座から「生きる力」の一要素として一人ひとりがライフデザイン¹⁾する力の醸成が重要であると捉え論じてゆく。そもそも家庭科は、生活実践における衣食住にかかわる知識・技能の習得に加えて、生活主体としてのライフスタイル選択にかかわる価値観に影響を及ぼす科目である。

ここで重要なことは、近年の社会や家族のあり方が多様化している現状をふまえ、一人ひとりの価値観を尊重することである。そして、就職、結婚、妊娠、出産、育児といった多様なライフイベントを主体的に選択する力をはぐくみ、固定的な性別役割分業観や標準的な生き方にとらわれず、自分らしくライフデザインする力を習得させることが期待される。具体的にどのライフイベントを、どのタイミングで自分の人生に組み込むのか、あるいは組み込まないのか、また計画通りにいかない際にはどのように軌道修正するかといった思考力・判断力にもとづいて課題解決する能力が必要である。

しかしながら家庭科の位置づけは、社会が変動するなかで大きく揺さぶられ、「国家的使命を担う位置づけがなされており、絶えずその使命に応えるかたちで、教科としてなんとか生き残ることができたともいえる」と指摘されている (細江, 2010)。1990年代前半以降は家庭科も男女共修となったが、1958 (S33) 年に教育課程が全面改訂されてからの約30年間は、性別役割分業観を再生産する男女別修が行われていた。

確かに戦後の高度経済成長期 (1954～1973 (S29～48) 年) は多産多死から少産少死へと人口転換する過程で各国が歴史的に一度だけ経験する人口ボーナスの後押しを受け (Mason, 1997), 労働力人口比率が一時的に増加し主として男性が社会に出て働き、女性が家事・育児を担うという性別役割分業が合理的かつ可能であった²⁾。しかし現代は少子高齢化がすすむなか人口減少社会となり、経済面では低成長期が続いているため、男女ともに労働力として社会参画することが期待される方向に転じている。ところが、保育所待機児童問題にみられるように仕事と育児の両立には困難が生じ、税制面では給与所得者の配偶者を優遇する所得控除の制度が継続されているなど、現代は真の男女共同参画社会に向けた過渡期だと言える。

こうした社会変動のある過渡期だからこそ社会の要請と個人の価値観を切り離し、自分らしく主体的に思考・判断する力をはぐくむことが、より一層重要な意味を持つ。本稿では家庭科領域の視座から教員養成課程における教師教育の一環としてライフデザインする力をはぐくむ試みについて検証する。

2. ライフデザイン・プログラム

2013 (H25) 年から内閣府が地域少子化対策重点推進交付金事業を推進し、事業実践の優良事例として、婚活支援、子育て支援、男性の育児参画支援、ライフデザインセミナーなどを紹介している (内閣府, 2018)。それぞれの実践を通して、結婚する意欲がある人に出会いの場を提供することや、出産・育児を支援する取組みは大切であるが、決して結婚や出産することを標準的な生き方として強くない立場を維持するバランス感覚が求められる。

この交付金を得て滋賀県健康医療福祉部子ども・青少年局と環びわ湖大学・地域コンソーシアムが連携して「ライフデザイン形成支援事業」に取組み、2016 (H28) 年度には、株式会社リクルートの協力を得て「大学生向けライフデザイン講座」を滋賀県内6大学にて、「幼児ふれあい体験」を5大学にて開催した³⁾。

その経験をふまえて2017 (H29) 年度には、環びわ

湖大学・地域コンソーシアムを中心として滋賀内の NPO 法人と大学⁴⁾が協働したプロジェクトチームを立ち上げ、滋賀県独自の「ライフデザイン・プログラム」を構築した。その概略は、巻末資料 1～3 に示しているとおりである。さらに「ライフデザイン・プログラム」実践の際に活用できる 3 冊のデータブックを作成した(写真 1 参照)。1 つは滋賀県のデータを多く含んだ『二十歳のライフデザインデータブック～自分らしく生きる～』(環びわ湖大学・地域コンソーシアム編, 2018) である。2 つ目は、大学生が県内で働く先輩 (5 ケース) を対象にインタビューを行って記事を執筆した『二十歳のライフデザインケースブック～自分らしく生きる～』(環びわ湖大学・地域コンソーシアム編, 2018) である⁵⁾。3 つ目は、しがぎん経済文化センターによるデータ収集の協力を得て作成した『二十歳のライフデザイン～自分らしく生きる～データブック・家計プラン編』(環びわ湖大学・地域コンソーシアム編, 2018) である。



写真 1 データブックとケースブック

この「ライフデザイン・プログラム」は将来的には高等学校での実践も視野に入れつつ、まずは大学生を対象とした 3 回(各回 90 分)の講座で構成した⁶⁾。第 1 回『ライフイベントを知る』では(巻末資料 1 参照)、前半はライフイベントとして何があるか考え、20 代から 70 代までにどんなライフイベントがあるのか書き出すグループワークを行う。次に、これまでの人生の浮き沈みを折れ線グラフに描く個人ワークを行う。後半は、学生生活を終え社会人になるとライフイベントを同時に複数経験するためマルチタスクになることや、プランドハブスタンス(計画的偶発性)理論(クランボルツ他, 2005)の学びを通して、予期せぬ出来事が生じても最善を尽くした対応を積み重ねることでキャリアが形成されることを学ぶ。

第 2 回『幼児ふれあい体験』は(巻末資料 2 参照)、子どもへの負担を考慮し親子とのふれあいは約 1 時間に限定し、限られた時間のなかで乳幼児とのふれあいと、学生があらかじめ考えてきた保護者に聞きたい質問に回答いただく流れで交流する。会場の準備は、土足の会場

の場合はクッションフロアカーペットを敷き、安全で衛生的な環境を整え、幼児の年齢に合わせたおもちゃを数種類準備する。

第 3 回『自分の未来をイメージする』は(巻末資料 3 参照)、第 1 回、第 2 回の学びや気づきを振り返り、仮想夫婦を設定して主として 30 代のライフデザインを考えるグループワークを行う。具体的にライフデザインする作業を通して、他者との価値観の違いを実感しつつ、これからの「ワーク(仕事)」と「ライフ(私生活)」について、なりたい姿をイメージできるように働きかける。そして、その実現のために未来につながる今何ができるのか、主体的に見つめる時間を設ける。

3. 「ライフデザイン・プログラム」を通じた学生の学び

このように構築された「ライフデザイン・プログラム」を 2017 年 12 月 6 日、13 日、20 日の 3 週間にわたって滋賀大学においても実践した⁷⁾。「ライフデザイン・プログラム」の参加者は「家族関係学」の授業を履修登録していた 2～4 回生 29 名(男性 4 名、女性 25 名うち 1 名留学生)であった。

本研究はプログラムに参加した学生が、毎回提出したアンケートの自由記述を質的に分析し、プログラム実践の有効性を検証したものである。この質的研究に際しては、客観性を保持しつつ恣意性を排除するために開発されたテキストマイニングソフト KH Coder⁸⁾を用いた。そして出現パターンが似た抽出語を析出し、出現数のと共起関係の強さを可視化した共起ネットワーク図を描写しテキストデータに隠された情報の抽出に用いた。

(1) ライフイベントを知る

学生は目前のライフイベントである卒業と就職、そして結婚や出産といったライフイベントは意識しているものの、それ以外のライフイベントへの意識は低く、「ライフイベントを 20 個以上考えてと言われたとき、そんなになんか思っただけだと思った以上にたくさんあった」⁹⁾と感じていた。意識しているライフイベントの他にも、一人ひとりの人生を自由に組み立てる選択肢となるライフイベントが複数あることを知る機会の必要性が示唆された。

その背景として地域ネットワークが希薄になった現代社会では、学生が親や学校の先生以外の大人と出会う機会が限定的であることが挙げられる。たとえ価値観の多様性が認められ自由にライフデザインする権利があっても、多様な選択肢そのものを知る機会がないため、「同じ仕事を一生続けなくてもいい」ということが新鮮な気づきとして指摘されており、終身雇用が一般的であった時代からの過渡期にある現代においては「転職」という選択肢が視野にない学生もみられた。

講座のなかで多様なライフイベントを意識し、そう遠くない将来の「30 代でライフイベントがたくさんある」ことや、社会人、生活者、そして配偶者や子どもを持つ親としてマルチタスクを同時にこなす必要が生じること

を知り、「同時並行で考える難しさ」に直面しても、「何が一番大切か優先順位を明確にすること」の大切さに気づいており、将来への備えの第一歩となったことが期待される。

共起ネットワークの図1にも現われているが、大学卒業後に経験する結婚や働くことに対して必ずしも明るいイメージを持っていないようであった。未知の体験には不安が伴いやすく「働くことに暗いイメージ」があったり、「子育ての不安」を意識する姿がみられた。そうしたなか、ブランドハプスタンス理論に触れ、人生の8割は偶然で構成されており計画通りに行かなくても大丈夫というメッセージを受け取ることで、「自分の人生は自分の心の持ちようでポジティブに変えることができると学び、自分の未来が少し明るくなったような気がした」、「想定外のことを不安に思うより楽しもう」と思えたとの気持ちの変化が語られていた。

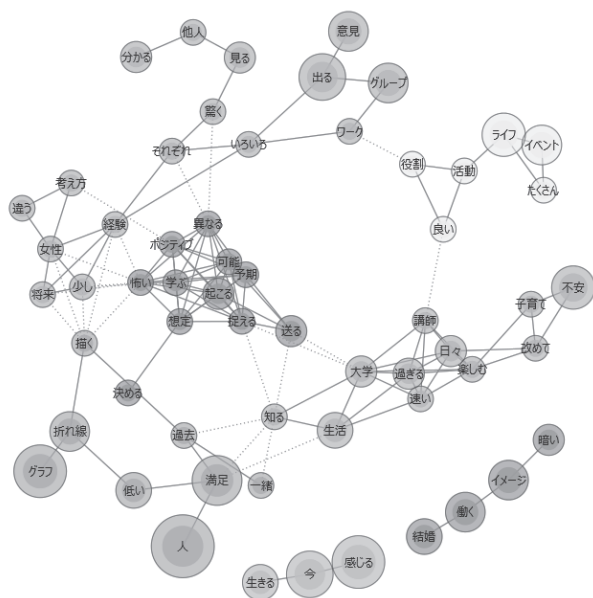


図1 『ライフイベントを知る』の感想(共起ネットワーク)

(2) 幼児ふれあい体験

第2回『幼児ふれあい体験』は、地域の子育て広場等に参加されている保護者に協力を呼びかけ、未就園親子の参加を得て実施した。当初10組の参加を予定していたが、当日親子の体調が整わず参加いただけなかったケースがあり、実際には7組の親子とふれあった。よってグループワークでは学生約4名ずつが1組の親子と輪になって行った(写真2・3参照)。

学生たちが考えた保護者への質問の概要をまとめると、出産してよかったこと、出産前にしておいたらよかったこと、不安なこと、辛かったこと、育児で気をつけていること、夫に求めることなどであった。このふれあい体験を通した学生たちの学びは、第1回のブランドハプスタンス理論と母親の言葉を重ねて、その時その時にベストな選択を行い、自分らしく前向きに人生に向き合おうとする姿がみられた。以下に、親

子とのふれあいを通した学生の学びを大きく4項目に分けてまとめた。



写真2 ふれあい体験



写真3 保護者の声を聞く

1) 実体験を通して知る育児生活の日常

参加学生の一部は幼児教育に関心を持っており、大学の授業で赤ちゃん人形に触れる経験があっても「人形とは違った」と述べていた。またはじめて実際にふれあった「4ヶ月の赤ちゃんはとてもしゃあらかくてあたたかかった」との感想も聞かれた。それと同時に「思ったより軽い」あるいは「意外と重い」と予想外の印象を持つ学生も多かった。そして「命が手の中にいることに緊張を感じたり、「抱っこしていると重さを感じ、電車に乗ったりすることが大変だと実感」する体験となっていた。

実際に多く語られていたことの1つは、図2にも示されているように「活発に動き回って」「次から次へと興味がつり、どんなものにも興味津々」な子どもの姿であった。このことから危険を避けるために「目を離すことができない」育児生活の**大変**さに気づき、「子どもと一日を過ごせば疲労し」、「体力がいる」ことを推察していた。かわいいだけではないリアルな育児にもなる責任を知ることで、**育児と教師の仕事との両立**について「少し不安な面も増えたが、幸せな気持ちも伝わってきたので**出産**について深く考える」ようになっていた。そして、このような育児生活の現実を目の当たりにして「言うことを聞いてくれなかつたり**大変**なことたくさんありそうだけど、やっぱり子どもが欲しい」と自らのライフデザインに育児の選択肢を組み込もうと主体的に考えたり、「出産後に孤独になってしまうと不安が募ってしまうので、出産前の準備が

大切だと感じた」という言葉も聞かれた。これらの言葉から、幼児とふれあう体験がないまま親となるケースが多い現代社会であるが、青少年期に幼児とふれあう機会が貴重であることが示唆された。

2) 心の拠りどころ

もう1つ多く語られていた感想は、子どもは「お母さんが好き」という事実への気づきであった。「遊びに夢中になっているとき以外はお母さんのところに戻る」姿から「お母さんの存在から与えられる安心感」を感じ取り、「お母さんが抱くと泣き止むのでさすがだ」と感じていた。そして、そのように子どもにとっての心の拠りどころとなっている保護者の姿を見て、「お母さんは強い」、「かっこよかった」、「偉大」と感じ、その保護者については「子どものことを本当に愛している顔をして」と親子を結ぶ絆の一端を垣間見ていた。

学生たちもかつては、保護者に守られ安心感を得ていたに違いない。しかし、幼い頃の記憶はかすみ、思春期以降に幼い子どもと身近にふれあう体験が欠如しているため、子どもは「お母さんが好き」という事実ですら新たな気づきとして認識されていたことは注目に値する。

3) 子どもとのかかわり方

幼児が様々なものに興味を示し「何でも口に入れてしまう」場面を不衛生に感じていたが、「でも注意されていなかった」母親の姿を観察していた。子どもの手に触れるものを衛生的に整えておくことは前提条件として大切である。しかし同時に、発達段階に応じて衛生面から行動を制止することよりも、口の触覚を含む五感を駆使して身近な世界を認知する乳児期の行動を認めることも大切であると学習する機会も必要である¹⁰⁾。

また子どもがよくないことをしている場面では「怒鳴らない」ように気をつけて、子どもが理解できる伝え方を工夫されていることが印象に残っていたようである。かつての少子化傾向となる以前の社会では、親となる前にきょうだい、親戚、近所の子どもが身近に存在してふれあう機会があったため、複数の「親」のロールモデルとの出会いが生活のなかにあった。ゆえに、あらためて学習の機会やロールモデルとの出会いの場がなくとも育児の知恵が自然に伝承されてきたが、現代では1つの情報として意識して伝える必要性が示されている。

さらに子どもたちとかわるときには「同じ目線で話すこと」や受身にならず「こちらから子どもたちに働きかけること」の大切さや、「子どもたちには積み木を並べたり何かしたいことがあって、それを支えて援助することでより楽しく遊べると思った」というように、親としてだけでなく子どもにかかわる教育者としての支援のあり方への気づきもみられた。こうしたことから教員養成カリキュラムのなかに幼児とのふれあい体験を組み込むことの意義は大きいといえよう。

4) パートナーとの分担

今回の参加者は母と子だけであったため、パートナーすなわち夫に求めることについての聞き取りがなされて

いた。母親の回答には個人差があり、「できることをしてほしい」、「家事をするときに(子どもを)みてほしい」という意見や「(外で)働くことも育児」という分業観も聞かれた。その一方で、「あやすだけでなく世話も」してほしいこと「(家事・育児を)手伝うではだめ」で「仕事と育児の両立の大変さ」を乗り越えるためにも公平に役割分担することを望む声も聞かれた。

辛いことをたずねられた母親の回答として、「寝る時間が確保できない」くらい育児は大変で、「時間のコントロールが難しい」ため、何事も思う通りにはすすまない日常が語られていた。そして、「家にこもりっぱなしになり孤独」であり、「自分のことができない」と感じ、「社会復帰したい」焦りも語られていた。これらの生の声から「旦那さんとの協力がいかに大切か」を知り、男子学生は「子どもができたとき、手伝うとは言わないようにしようと思った」、「仕事も子どもも、どちらも大切にしなければならぬ」と考えるようになっていた。小学校家庭科指導要領解説のなかでも重視されていることであるが、「お手伝い」ではなく責任をもって「分担」することが求められており、家事・育児を分担することが本当の意味での男女共同参画社会を実現するために必要である。

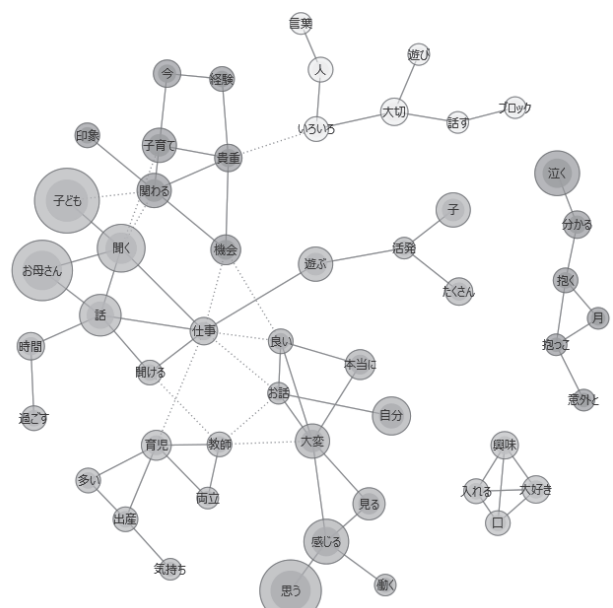


図2 『ふれあい体験』の感想 (共起ネットワーク)

(3) 自分の未来をイメージする

これまでの講座を通して、将来さまざまなライフイベントを選択しながら生きていくイメージをつかみ、実際に子育て中の親子と出会う中でそのイメージをより身近で具体的に捉えられるようになったところで、第3回の講座では仮想夫婦のライフデザインを考えるグループワークを行った。模造紙にグループごとに仮想夫婦のライフデザインを描き出す作業をするなかで「理想としては仕事をしっかりしてから、落ち着いた時に結婚、出産したいと思っていたが、現実的に考えると難しいことに

気づきました」,「30代になってから結婚することに対して、特別遅いとは感じていなかったが子どもを2人産んで、十分な収入があるうちに大学を卒業させると考えると、1人目を産んですぐに2人目を妊娠する必要があることが分かって、結婚が30歳を過ぎると30代が想像以上に忙しいと感じ、計画的にライフデザインすることの必要性が実感されていた。

学生時代までは学業や部活など1つの目標に専心してきた計画的で一生懸命な人であるほど、まずは仕事の達成感を感じるまで一途に努力しがちである。しかし、マルチタスクを同時並行でこなすライフステージにあっては、ワーク（仕事）に注力すると同時に、積極的にライフ（私生活）も充実させる意識を持つことが必要である。そして「1つのライフイベントでもさまざまなことと繋がっていたり、お金、周りの状況、自分の状況、すべてが必要」であることから、さまざまな生活資源を調整して有効活用する生活経営能力が求められる。

ライフデザインを考える作業を、個人ワークではなくグループで話し合うところに1つの鍵があり、いつ結婚するのか、結婚式は挙げるのか、どこに住むのか、マンションか一軒家か、子どもの数、育児期の仕事はどうするのか、車は買うのかなど意見交換するなかで、「自分とは違う意見を持っている人と話し合うことで、いろんな発見があって面白い」と感じたり、「自分が考えていることが絶対ではなく、いろいろな考え方があるのだということを心に留めておこうと思った」という気づきがみられた（図3参照）。同世代であっても価値観は異なるであることを実感できる協働性のある学びの場となり、「4人で話していて、人それぞれの考え方があり、結婚するというのはパートナーの人生観も受け入れて、自分の人生観と重ね合わせていくものなのだと思った」と感じる学生もみられた。価値観の多様性を互いに尊重しつつ、自分と相手との価値観の折り合いをつけていくことの重要性も学ぶことができていた。

4. まとめ

大きな社会変動の過渡期に生きる現代の若者が「生きる力」を身につけ、社会の要請に流されることなく個人の価値観にもとづいて計画的にライフデザインする力をはぐくむために、2017年度に滋賀県独自の「ライフデザイン・プログラム」が構築された。本研究は教員を目指す大学生を対象に「ライフデザイン・プログラム」を実践し、その有効性について参加学生が書いたアンケートの記述から分析を行った。

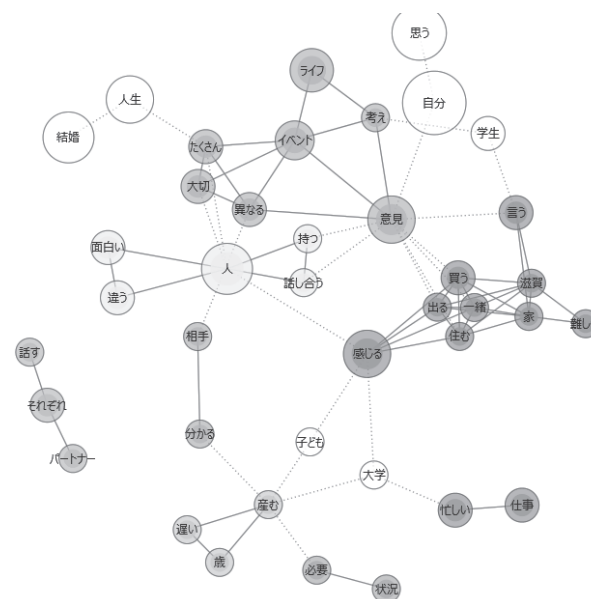


図3 『未来をイメージする』の感想(共起ネットワーク)

ライフイベントとして就職、結婚、出産等は意識しているものの、その他にも多くのライフイベントが存在することへの意識は残念ながら低く、予想外に近い将来に様々なライフイベントを取捨選択することになることは、ほとんど意識されていなかった。つまり理想のライフデザインを考える前提として不可欠な、ライフイベントの選択肢を知らないのが現状であり、ライフデザインする力をはぐくむ以前の課題が浮き彫りとなった。

今の学生の身近に転職経験者もいるはずであるが、終身雇用が一般的だった時代の価値観が残存しており、転職という選択肢はあまり意識されておらず、結果としてライフデザインに際して柔軟性に欠ける傾向が指摘できる。多くの選択肢を知ることとはとても重要で、不測の事態への対応力が高められる。具体的に3年後になりたい姿という短期目標を見据えて、今から何ができるか課題を意識する作業が、学生の主体的行動を引き出す仕掛けとなり、目標の実現可能性が高まることを期待したい。

また、「理想としてはしっかり仕事をしてから、落ち着いたとき」まで結婚・出産を先送りしようとする姿は、近年の晩婚化晩産化傾向をもたらす一因といえよう。出会いを経て結婚しても、定年退職するまでに子どもを育て上げようと思うなら「1人目を産んですぐに2人目を妊娠する必要がある」ことや妊娠能力には不確実さが伴うため望んだタイミングで妊娠できるとは限らないことを知ることも重要である。

ライフデザインする際に、学生時代までのように何か目標を目指してシングルタスクの達成を重ねるイメージのままであれば、卒業後もまず仕事その次に私生活の充実という順で考えてしまうことになる。しかし仕事と私生活についても同時並行で考え、マルチタスクをこなそうとする発想の転換が必要といえる。そして、たとえ様々な場面で思い描くように人生が運ばなくても、あるいは

家族や将来のパートナーとの価値観の違いに戸惑っても、ブランドハプスタンスの学びを生かして、最善を尽くして柔軟に対応する経験の積み重ねが、一人ひとりのキャリアアップに繋がることを確信して前向きに生きていくことが期待される。

実際に育児中の親子と出会いふれあう体験は限られた時間であったが、育児に伴う責任感、育児負担、幼児とのかかわり方が、体験を通しての気づきとして語られていた。裏を返せば、学生が日常生活のなかで乳幼児親子と出会いふれあう機会が現代社会において欠如していることを意味している。かつての社会では自然に伝承されていた育児の知恵を、あらためて「学習」したり、親役割を担うロールモデルと出会う機会が必要となっているといえる。

このようにメリットの多いふれあい体験であったが、出会う親子が母子に限られてしまったために、意図せずして育児は母親の役割かのようなロールモデルを示してしまっていた点のデメリットは否めない。今後の実践に際しては、可能な限り父子の協力を得られるよう努力するとともに、実際のふれあいが物理的に難しい場合に備えて、父親にインタビューして映像記録とするなど子育てする父親のロールモデルに触れる機会の確保も検討する価値がある。現時点で学生たちは必ずしも伝統的な性別役割分業にとらわれておらず、男女ともに仕事や家庭を持つことへの前向きな意欲がみられ、真の意味での男女共同参画社会の実現に希望が見出された。

以上のように「ライフデザイン・プログラム」に一定の有効性は確認できたが、プログラム自体の構成を省察すると、第1回ではライフイベントの多様性に気づき、近い将来マルチタスクをこなす力が必要であることと、ブランドハプスタンス理論の学びがポイントであった。人生折れ線グラフを描くワークを通して、満足度は人によって違うことへの気づきが見られたが、多様な価値観や発想の転換については他のワークの気づきと重複するため高校生版を構築する際には割愛可能な部分と判断できる。第2回目のふれあい体験では、前もって保護者に聞きたい質問を考えたメモを持ち込ませることで、当日ふれあう時間を有効活用でき、事前準備することでより能動的な参加と交流が可能となっていた。第3回目にはグループで1枚の模造紙にライフデザインを描きだしたが、第1回の講座で複数のライフイベントを確認した成果を生かして、それらのライフイベントを短冊状に印字したものをグループ毎に配布できれば、多様なライフイベントから取捨選択する作業を可視化したより内実を伴ったグループワークの展開も可能となるであろう。

また「ワーク・ライフ・バランス」の含意は、仕事と私生活のバランスには違いないが、ここでいうライフ(私生活)は家事・育児等のタスクを指すかのように捉えられ、プライベートな趣味も含めた理解につながっていたのか曖昧さが残っていた。標準的な生き方を強くないた

めにもライフの部分の幅広さを丁寧に伝えつつ、ワーク・ライフ・バランスの意味を誤解なく伝える工夫も課題である。限られた時間を有効に活用するためにも、データブックを活用し3回の連続講座を可能な限り有機的に連動させて、より効果的に学びを深める工夫を重ねていかなければならない。

(注)

- 1) 文部科学省では若者のライフプランニング支援事業が推進され、学校教育段階におけるキャリア教育の推進が目指されているが、大石(2001)が指摘するように「1990年代に入り、生活設計は経済設計に偏重してきたライフプランからライフデザインへと変化してきた」ことをふまえ、本稿ではあえてライフデザインという表現を用いる。
- 2) 総務省の労働力調査によると女性の労働力率が1975(S50)年には45.7%と半数を割り込み、専業主婦が多く、性別役割分業が一般化していたことがうかがえる。
- 3) 大学生向けのライフデザイン講座は滋賀大学、滋賀県立大学、聖泉大学、長浜バイオ大学、びわこ学院大学、龍谷大学にて述べ10回開催され、計335名が参加した。幼児ふれあい体験は滋賀大学、滋賀県立大学、聖泉大学、びわこ学院大学、龍谷大学にて開催され計120名が参加した。
- 4) 滋賀子育てネットワーク、ほんわかハート、子民家エトコロおよび滋賀大学、滋賀県立大学、びわこ学院大学で、筆者も参画した。
- 5) うち2ケースのインタビューと記事作成は滋賀大学教育学部4回生2名が担当した。
- 6) 2018(H30)年度は、高等生向け「ライフデザイン・プログラム」のモデル開発に取組み河瀬高等学校(1年家庭科)、甲南高等学校(3年選択科目)にて計7回開催されている(2018年11月30日現在)。
- 7) 2017(H29)年度には、滋賀大学、滋賀県立大学、びわこ学院大学にて実施された。
- 8) KH Coderとは、テキストデータの分析に際して恣意性を排除して統計的に分析するために樋口耕一氏が公開しているフリー・ソフトウェアである(樋口, 2004)。
- 9) 本文中の「」内の表現は、学生アンケートから抽出したもので、共起ネットワーク図に示された頻出抽出語はゴシック体で表記している。
- 10) 清潔志向ゆえに過度に除菌することが、免疫力の低下を招くリスクも指摘されている(藤田, 2015)。

参考文献

- 大石美佳(2001)「ウ 生活設計」石川実編著『高校家庭科における家族・保育・福祉・経済』, 家庭教育社, 57-71頁
- クランボルツ, J.D. 他(2005) 花田光代, 大木紀子,

宮地夕紀子訳『その幸運は偶然ではないんです!』

ダイヤモンド社

内閣府 (2018) 「地域少子化対策強化事業の効果検証・
分析と事例調査【全体版】(PDF版) 平成29年度
内閣府委託事業」 [http://www8.cao.go.jp/shoushi/
shoushika/research/h29/kensho_bunseki/index.
html](http://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/research/h29/kensho_bunseki/index.html) (2018年11月15日閲覧)

樋口耕一 (2004) 「テキスト型データの計量的分析 —2
つのアプローチの峻別と統合—」『理論と方法』(数
理社会学会) 19 (1) : 101-115

藤田紘一郎 (2015) 「「清潔志向」日本のゆくえ (特集
「菌」と暮らす)」『母の友』(740), 51-55 頁

細江容子 (2010) 家庭科の中の社会学, 日本社会学会
編『社会学評論』61 (3) 277-293 頁

Mason, A. (1997) ' " Population and the Asian
Economic Miracle', " Asia-Pacific Population &
Policy" No.43.October.

巻末資料 1 第 1 回 『ライフイベントを知る』

時間	項目	内容	【PW】：個人ワーク、【GW】：グループワーク
10分	オリエンテーション	ライフイベントに関するデータを紹介（平均初婚年齢等）	
10分	ライフイベント	年代ごとに20以上考える【GW】（ワークシート①）	
5分		就労、結婚に対するイメージ（ワークシート②）	【PW】→【GW】
10分	人生折れ線グラフ	各自グラフを描く（ワークシート③）	【PW】→【GW】
15分		講師（またはゲスト）の事例を聞く データブックの情報を確認する	
5分	ライフデザイン	卒業後は仕事と同時に多様なライフイベントを経験することを伝える	
10分	ブランドハプンスタンス理論	なりたいたい姿を意識すると同時に、偶然や想定外を前向きに受け止める思考の習得し、変化に強くなる	
15分		ケースブックの事例から転機の乗り越え方を知り、感想を共有	
10分	まとめ	アンケート記入（【GW】の感想3つ以上、印象に残ったことベスト3、全体の感想、子育て中の保護者に聞きたい質問3つ）	

巻末資料 2 第 2 回 『幼児ふれあい体験』

時間	項目	内容	【PW】：個人ワーク、【GW】：グループワーク
10分	オリエンテーション	学生と親子それぞれに本日の趣旨と具体的な進行を説明	
5分	グループ分け	親子と学生のグループ分けを行い、輪になって座る	
40分	ふれあい体験	保護者に質問を行いながら、幼児とふれあう【GW】（ワークシート④）	
5分	片付けと見送り	学生はおもちゃを片付け、保護者はアンケート記入して解散	
20分	気づきの共有	ふれあい体験を通した気づき【GW】→グループごとに発表し全体で共有	
10分	まとめ	アンケート記入（ふれあい体験の感想、具体的な質問内容と回答、結婚・育児に関する具体的なイメージについて、共有の時間を通した感想）	

巻末資料 3 第 3 回 『自分の未来をイメージする』

時間	項目	内容	【PW】：個人ワーク、【GW】：グループワーク
5分	オリエンテーション	第1回、第2回の学びや気づきの振り返り	
30分	ライフデザインを考える	仮想夫婦の設定を聞き、男性役と女性役を決め40歳までのライフデザインを模造紙に描く【GW】 随時、データブックの経済的情報を紹介	
10分		グループごとに発表し全体で共有	
10分	ワーク・ライフ・バランス	ワークとライフを包括的に捉え、働き方をデザインする	
15分	20代、30代の過ごし方	この先のライフイベントを具体的に捉え、マルチタスクを同時並行で考える必要性に気づく	
10分	3年後の自分をイメージ	なりたいたい姿を実現するために、今から何を始めるべきかを考える【PW】（アンケート）→全体で共有	
10分	まとめ	講義全体を振り返り総括 アンケート記入（グループワークの感想、これからの働くこととプライベートのイメージ、3年後なりたいたい姿と今日からできる第一歩について）	